

千葉における「子ども大学」の実践展開の検討

～地域における社会教育プログラムの必要性～

Action Research for “Children’s University” in Chiba

— Need of Social Education Program in Community —

田村 光子¹

世界的な展開を見せている子ども大学 (Children’s University) を千葉で実践した過程を報告するとともに、その実施展開の中で、地域の中で求められる社会教育プログラムの必要性について検討を試みた。実践展開とその検討から、新たな印象や感情のある学びの場、世代や立場の違いの中で相互作用する学びの場が求められていること、知の創造の場を介在とした多種多様な所属を超えた交流、世代を超えた人々による支援的關係、さらに実践と研究がコラボレートする関係がうまれ、新しい価値観が創造されていく可能性を実感させられた。さらにこの実践がコミュニティにおける子どもの学習環境不利益へのアプローチとして子どもの発達保障への重要な示唆も含んでいることを検討した。

キーワード：子ども大学、学びの場、社会保障、コミュニティ

1. はじめに

子ども大学 (Children’s University) (以下「子ども大学」) は、世界的に展開がみられるプログラムである。ドイツ・ミュンヘンでは、「Kinder-Uni」が展開され、2005年にEU賞を受賞している。都市計画の目標として、こうした取組が展開されているミュンヘンと同じ環境とは行かないまでも、千葉の地で同じような取り組みができないか。“大学”という場で創造される知、人材を“子ども”のために提供すること、さらに“大学”(=学びの場) という場が「コミュニティの中心」として生かされることを趣旨として、2008年¹⁾、2009年²⁾の2年度にわたって、千葉大学および千葉市において「子ども大学」を実施した。本研究では、この実践展開から、いま求められる地域における社会教育プログラム実

践について検討を試みたい。

2. 「子ども大学」実施の背景

「子ども大学」の展開は、千葉大学21COEプログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」における社会実験的な取り組みから始まった。本プログラムの目的にある「世代継承生成的な公共性、研究者—市民の連携による実践的学問、公共的市民の育成」等について、「子ども大学」の展開を通じてアプローチできるのではないか。「子ども大学」の実践を通して、市民・コミュニティへの知の還元とともに、コミュニティにおけるクリエイティブな実践・経験の知との相互作用が醸成されることが目指された。

上記のような目的から、「大学—地域連携実行委員会」³⁾が発足。「子ども大学」の取り組みに向けて、学生発ベンチャーを展開するNPOや、大学近隣の

¹⁾ 2008年8月、千葉大学西千葉キャンパスにおいて実施した「子ども大学 in 千葉大学」

²⁾ 2009年7月、千葉市の社会教育施設「きぼーる」で実施した「子ども大学 in きぼーる」

³⁾ 現在、「西千葉大学実行委員会」として展開

商店街を中心に地域通貨を展開するNPO、さらに他学部で同じような夏休みの子ども対象のプログラムを実施するプロジェクトチーム等、学部や大学の壁を越えて様々な主体が参画した。また実施に際しては、いくつかの企業から子どもたちが使用する物品を無償で提供をうけるなどの協力も得た。さらに2年目の実施展開では、行政からのバックアップも受けることができた。

近年では、“大学”という場における意識変革が大きく求められている。知の創造の場としての大きな役割に加えて、市民・企業・NPO等とのコラボレートによる新たな知の創造（実践・経験知とのコラボレーション）が目指される方向にもあるだろう。さらに「子ども大学」への協力には、“子ども”という存在を社会・コミュニティで支えて行こうという理念への賛同が背景となっている。知の創造の場で“子ども”という存在を軸にした取り組みをコミュニティレベルで実施すること、それは、少子高齢社会という多世代協働参画によるまちづくりが目指される中、年齢・属性・システム化された社会の壁を超えたコラボレーションを実現するひとつの方法を示すものになるだろう。

3. なぜ「子ども大学」か？

「子ども大学」の展開にむけて、その効用は“子ども”にあるのか。第一に、「果たして大学の研究者の講義を、子どもたちが聴くことが可能なのか」—この問いへの一つの答えを、ミュンヘンで「子ども大学（Kinder-uni）」を展開している「NPO文化と遊び空間（Kultur & Spielraum e.V）」事務局長マーギト・グリューナイズル氏が次のように語っている。

「子どもの好奇心と教授には共通性がある。何かに対し疑問をもち、答えを探している点が同じ。子ども大学（Kinder-uni）では子どもたちの“how”よりも“why”を大切にしている。」

子ども大学における講義テーマは、子どもたちのもつ“why”（＝なぜ？）を大切にしている。“how”に比べて“why”には、その疑問に対する事実としての答えだけでなく、それぞれの子どものための疑問にいたるまでの話題を含んだかたちでのテーマ設定がされ、子どもたちに関心をひきつける。さら

に講義時間を30～45分と設定したり、事前に教育されたアシスタントによる講義中の子どもたちへの細かな対応等、緻密に組織化された教育プロジェクトとなっている。

上記の問いの根底には、「子どもたちには高度な専門知識は学べない」ということが前提となっている。一方で「子ども大学」には、子どものもつ潜在能力の信じる点に可能性が広がる。“how”は早く答えには近づきやすいが、“why”はなかなか答えにたどり着かない。というよりも“why”には答えは必要としない。だからこそ自由な語りが可能となる。子どもの子どもの生活背景の中で自由に感じ、考えること、それは生命・生活レベルでの自由な意識に基づいた学びへの可能性がそこにある。

「子ども大学」の実際的な展開には、講師陣となる大学教授の協力は欠かせない。大学教授が、“子ども”という存在を聴衆として講義する。30～45分という子どもに配慮した講義時間の中で、配慮された表現で高度な専門的知識を伝えなければならない。その上「子ども大学」では教授らの報酬は一切与えられない。（ミュンヘン、千葉で同様）これに同意し、講義を引き受けるということ、それは子どもの自由な意識に基づいた学びへの理解の上に、それに基づいた知の還元（＝子どもたちにとっては「学びの場」）の必要性への認識がなくては成り立たない。「子ども大学」のアクションは、「子どもには大学での専門知識は学べない」という固定的概念から解放とともに、子ども、親だけでなく、研究機関、研究者にとっても大きな意識変革につながる取り組みの一步となる可能性がある。

4. 子ども大学の実際的な展開

「子ども大学」は、千葉市内の小学校4、5、6年生100名を参加対象としている。千葉市教育委員会からの指導をうけ、申し込みには保護者の同意書をつけること、千葉大学周辺小学校長の了解を得た上で配布するなどの十分な配慮を必要とする。100名の子どもを対象とすることは、魅力的な展開が予想されると同時に、個々の子どもたちが持つ力や個性のちがいが大きく作用する場ともなる。また事故への対応等も含め、慎重な扱いを必要とする。留意事項、交通への対応などを十分に配慮した申込書を

表1 「子ども大学」のテーマの概要

「なぜ環境を守るのか—温暖化ってなんだろう」 (千葉大学・倉阪秀次 先生) <08年>
「なぜ友愛が必要なのか—地球人の哲学」 (千葉大学・小林正弥 先生) <08年>
「なぜ投票するのか—民主主義とはなんだろう」 (千葉大学・水島治郎 先生) <08年>
「子ども・大人・老人—人間の一生ってなんだろう」 (千葉大学・広井良典 先生) <08年>
「なぜ、ヒトは、人になったのか」 (慶応大学・岸 由二 先生) <08年>
「なぜ人は“家”に帰るのか？」 (愛知産業大学・延藤 先生) <09年>
「なぜ“家族”は一緒に暮らすのか？」 (放送大学・宮本みち子先生) <09年>
「なぜ“まち”に出会うのか」 (千葉大学・木下勇先生) <09年>

作成し、さらに許可をもらったうえで周辺小学校へ直接訪問し、実施目的や内容について了解を得たうえで、申込用紙を学校配布している。学校配布には、こうしたプログラム実施について平等な情報提供がなされることを考慮して行っている。

また、「子ども大学」では、千葉大学の後援をうけ、日本の論壇をリードする教授陣による、質の高い議論を含んだ内容を子どもたちに提供してきた。スタッフや関係者の大人にとっても興味や関心を抱く、十分高い知識に結びつく高度な知識を含んだ内容を子どもたちに提供することは非常に難しい試みであるものの、そこには主体的に、そして自由に学びの場に参加する子どもたちの姿がみられる。

(表1)は、これまで2回にわたって実施した「子ども大学」におけるテーマである。2008年は実施主体との関連から、環境、哲学、福祉、政治、進化論と広い範囲から「公共性」について子どもたちに語りかける内容となった。2009年には、初年度のアンケートから、子どもたちの来年度のテーマへのニーズに、「家族について」をテーマにしたいという声があがっていた。そこで、「家・家族・まち」をテーマに、都市計画、家族社会学の分野からの内容となった。

子どもたちには、テキストと称したガイドブックが配布される。ここには、講師の写真入りの講義内

容がまとめられていたり、案内図、諸注意など、活動概要もおさめられ、持ち帰ることで保護者への報告機能としての役割も考慮されている。

また、「子ども大学」は2部制になっており、午前は講義、午後はフィールドワークとなっている。子どもたちの経験としての参加効果を考慮し、身体的体験を重視したフィールドワークを位置づけている。始めて会った仲間との少人数のグループで展開されるが、ここで活躍するのが大学生である。各グループ・リーダーとなる大学生たちは、子どもたちとの対応について、はじめての出会いの場の対応、危険への対応、講義中のフォロー、フィールドワークにおけるプログラムの応用など、事前に細やかに綿密に教育され参加する。また効果的な体験知を可能にするプログラムの設定、環境設定についても配慮されている。これらを可能にするのが、さまざまな協力団体である。ある団体⁴⁾は、学生のインターシップ支援、特に学生が大学で身につけた専門化された能力を最大限に生かすためのプログラムの企画提案を大学内でアプローチしており、「子ども大学」では学生の人材登用、教育に協力した。さらに、2009年からは、プロジェクトベース学習による学びの場を地域で開拓しているNPO⁵⁾も参加協力し、より子どもたちの実質的な学びに近づける講義テーマやフィールドワークを組むことができた。また、「子ども大学」の魅力は学食にあるといってもよい。2008年の「子ども大学in千葉大学」では、大学という場の設定から、大学生協の協力で学食を昼食に利用したが、2009年の「子ども大学」では、社会教育施設を利用したことで、周囲の商店街等の協力を得て、町の中にいくつかの学食をつくりあげた。さまざまな配慮や手続きを要したものの、いくつかの飲食店から子ども大学のためのワンコインメニュー(500円メニュー)の特別提供を得たり、県庁の展望レストランでの学食が可能になるなど、多種多様な場の協力から形づくられる「子ども大学」は、一つのコミュニティ形成への示唆ともなる活動となっている。

フィールドワークにおける子どもたちと学生のグ

⁴⁾「千葉大ネットワーク Pro-SecD」(現在(株)プロシードジャパンとして起業)

⁵⁾「PBLスクール千葉」(現在NPO法人設立中)

ループは、はじめて出会った仲間とは思えないかたちで協力し、さまざまな力を発揮してくれる。

2008年「子ども大学in千葉大学」では、さまざまな学部や大学内の施設をまわりながら子どもたちの目線で“大学”という場をちがう目線にとらえさせる。例えば、大学ならではの階段教室や天井の高い建物や高い棟に上ってみたり、図書館では高い棚にたくさんの蔵書が迫ってくる感覚を覚えたり、さまざまな研究室と言われる場の雰囲気に酔いしれたり、一般の大学生や留学生に子どもたちからインタビューするなど、子どもたちの好奇心があたりまえの日常に新鮮さを注ぎ込む。それを受けて、学生も学部で分断された生活から新たな視点で大学の価値に触れることができたという反応があったようである。

2009年「子ども大学inきぼーる」では、千葉の街歩きを通して「子ども感覚まちマップ」を大学生と子どもたちで作成することを内容とした。車中心の街づくりとなっている千葉を、子どもたちと大学生で道草し、感情を落としながら歩く経験、人や場所との出会い、その経験を地図に落としこむと内容である。「2時間ほどの街歩きだけで、子どもたちは地図を作り上げることができるのか」という不安は、地図の完成をみたらまったく消えてしまった。県庁のスカイレストランで食事をしたグループは「県ちゃんレストラン」、かまぼこのような橋のかた



千葉の街歩きと感覚
まちマップの創作

<子ども大学in
きぼーる>
(09/7/31)

ちだったと「かまぼこ橋」など、千葉の街を明るくするようなネーミングを子どもたちの自由な発想が彩る。また、地図には「ここで遊んで楽しかった」「この道は臭いにおいがした」など感情を場所に落としながら、

さまざまな環境とふれあっている様子が描かれている。「かき氷たべたよ！おばちゃんふとっばらー」という文句には、甘味処に立ち寄ったグループが、自分でかき氷をつくらせてもらい店主が料金をまけてくれたというエピソードがこめられている。子どもたちの好奇心とその行動力は、人と人、人と環境をつなぐちからを持っている。普段は意識していないと見えないものの魅力や可能性を、子どもたちのそのちからによって、あらたな視点で私たちの目の前に浮き彫りにすることができるのかもしれない。

5. 子ども大学への反応 ～子どもたち・スタッフ・親～

「子ども大学」における子どもたちの表情や行動からは、子どもたちが主体的に“学ぶ”ことに対してアクションし、挑戦しようとしている場となっていた。講義での子どもたちの表情には、はじめて大きな講義室やシアターでの大画面のプロジェクターを興味深く・真剣に見つめる子どもたちの姿勢があった。

リーダーとなる学生の配慮や援助があれば、子どもが積極的に大人に質問し語ることができる。ある参加者の親からは、塾の夏期講習を休ませて参加させたという声もあった。講義で学んだことから“民主主義”について、いまの自分でできる限りのちからで考え、夏休みの宿題の作文として提出した子どももいた。その内容は次のようなものである。



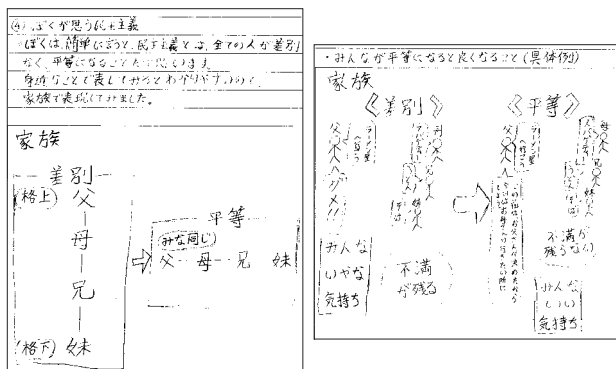
講義の様子<子ども大学in千葉大学>
(08/8/1)

「民主主義について」 (田中優希)

民主主義とは、できるだけ多くの国民が政治に参加して、きまりやルールと落ち着きをつくりだそうとする国民が主体の主義のことです。(中略)僕は簡単に言うと民主主義とはすべてに人が差別なく平等になることだと思います。身近なことで表してみるとわかりやすいので家族で表現してみました。(下図)

このように格上でも格下もなく、みな平等になり、みんなが意見を出し合って、その中から、みんながよくなると思うことを決めることなのだと思います。

ぼくは民主主義はととても良い考えだなと思いました。けれどこの民主主義を成立させるには、みんなが参加しないとだめなので、みんなの生活を良くするためにちゃんと意見を出し合っていかなければならないなと思いました。



田中優希作：作文「民主主義について」
 <子ども大学in千葉大学 (09/8/1) をうけて>

子どもが自ら“学ぶ”という行動、そこに参加しよう、学んだことを表現しようとする自らアクションを起こすようになること、このような子どもたちの主体的な学びの場を子どもたち、また親たちも求めている。

学生の反応においても、「日常生活において、子どもと接する機会があまりなかったが、参加してみて子どもは素直でストレートだし、そういうリアルな反応



休憩時間に遊ぶ子どもたち
 <子ども大学inさぼーる>
 (09/7/31)

がすごうれしかった」、「教育実習を終えたが、多学年の子どもを同時にまとめるのは初めてであったり、学校でのプログラム化された中では感じ取れなかった子どもの反応を感じた」など、若者たちが完全に他の年齢と分断された生活を送っていること、子どもたちとかかわりあいながらそれをつなぐ場を「子ども大学」を通して与えられたことがわかる。また、子どもたちにとっても、大学生の存在は新鮮である。大学生たちは、子どもたちに身近な将来への希望や憧れを抱かせる大きな役割を果たしている。

「子ども大学」に子どもを参加させた親にとって、その学びの内容に大きな関心があることは間違いない。子どもに「今日は大学でどんな勉強をして、何を得られたのか」と問う親も多いだろう。親の声からは「なんだかよくわからなかった」「考えさせられてしまった」とさまざまな声が子どもから聞かされているようである。「子ども大学」の学びは、内容が理解できたかどうかには価値があるのではなく、子どもや親、また関わった人々の願いや思いがある場に子どもがいることに価値がある。教授による講義には、専門的な知識を理解することではなく、見聞きした知識のほんの一部が心に残ったり、プロジェクターをみたりマイクを使って質問したりという“大学”ならではの環境の中で学んだという印象から感情が生まれることに意味がある。

若者にとって、子どもにとって、そして親にとっても、新たな印象や感情のある学びの場、そして世代や立場の違いの中でそういったものが相互作用するような学びの場に新たな可能性を感じさせられる。

6. コミュニティにおける子どもの発達保障の場の必要性

コミュニティとは、地理的な条件から、精神的なよりどころとしての機能まで広くとらえられる概念であるが、子ども大学の体験は、子どもたちやそこに参画した人々の感情や印象を生み出し、子どもたちを主体的にさせる地理的条件にまで及んでいた。広井 (2009) は『『学校』は「新しい知識」という「外の世界」との接点」とし「コミュニティの中心」として、学校や大学といった知の創造の場の意義を

示唆している。コミュニティはもともと「共」の役割を担うものだが、「子ども大学」の体験には、知の創造の場を介在とした多種多様な所属を超えた交流、世代を超えた人々による支援的關係、さらに実践と研究がコラボレートする關係が生まれ、新しい価値観が創造されていく可能性を感じさせられる。

またこうした可能性はコミュニティの新たな視点だけでなく、あたらしい子どもの発達保障の視点も生み出すことになるかと筆者は考えている。「子ども大学」の経験は、子どものコミュニティへの参画を根底にし、そこには、強い意志や高い知識の獲得を目指すものではなく、子どもが身近に自由にさまざまな人・物・知に触れ、感情をもち、表現する場を保障することにある。

近年、日本では社会保障の視点からの子ども政策の不足が指摘されている。いま注目される「子どもの貧困」の視点からは、家族の経済的困難や孤立等の福祉的課題が子どもたちの学びの環境的不利益を生んでいることが指摘されている。

また、日本は「教育機会の平等」を公的に保障し、学校教育に代表される「標準化された教育資源の配分」を主としてきた一方で、こうした画一的な教育体制への批判から、多様性や個性の尊重への転換が図られたりもしてきた。しかし荻谷(2009)によれば、「個人間の差異を際立たせない」形で、「自立した個人の育成」を求め、その結果「社会全体で追うべき問題を棚上げ」していると指摘されている。

ギル・ヴァレンティン(2009)は、新たな公共空間を作り出す存在として「子ども」に特にその遊びに注目しながら、子ども・若者が大人のまなざしや管理から自由になり遊ぶことができ、プライバシーを持ちながらも大人による導きや保護の枠内に留まることができるような、安全で開かれた公共空間を地域コミュニティの中に創ることの必要性を説いている。さらにこれは地域コミュニティの活性化だけでなく、過度な危機管理や監視のある子育て文化を和らげることにつながることを示唆し、コミュニティへの子どもの参画の必要性を説いた。

これらの視点は、子どもの発達保障を支える環境不利益へのアプローチの視点として、さらに今後の「子ども大学」の展開に重要な示唆を与えるものである。「子ども大学」の展開は、子ども期のラ

イフチャンスの保障、特に「画一的な」「自由な選択」といった視点、「機会の平等」や「金銭的な援助」を超えたかたちで、実際的な子ども一人ひとりへの発達保障につながることを目指さなくてはならない。「子ども大学」のアクションから生まれるコミュニティ創造の視点、また子どもの参画を育む意識から人々の連関が生まれ、そこに学びの場があること、こうした視点は、あたらしい学びの場、地域における社会教育プログラムの必要性を訴える視点になるだろう。

7. おわりに

私は、近日冬のヨーロッパを旅する中で、冬休みの子どもたちが大人の引率で教会や博物館などを回っている様子をよく見かけた。学校やコミュニティの中で、こうした冬の文化的プログラムが仕掛けられているのかもしれない。スイス・ドイツを回ったがこの光景は両者で共通にみられ、一方日本では、こうした様子が少なくなったと考えてしまった。

日本においても、個人の意思と少々の経済的負担があれば、自由に参加できるさまざまな教育プログラムは増えてきている。しかしながら、ヨーロッパは日本以上に、参加の意思は個人の自由な選択にまかされているはずである。問題は、選択への意思の強さにあるのではなく、日本において明らかに子どもの社会参加をコミュニティ単位で支える動きが弱まっていることを考えなくてはならない。

いま地域でつくられる学びの場とは—これからもとめられるアクションは、コミュニティの再生と子どもの発達保障の両者が融合的にアプローチしていくことにあるのではないか。公共空間における子どもの存在への再考、さらに今日の日本では分断された教育と福祉の政策的融合を視野に入れた取り組みが注目される。

(引用・参考文献)

- 1) 木下勇 (2007) 「ドイツのミニ・ミュンヘンと補完性の原理」こどものまちサミット実行委員会・こどもがつくるまち研究会『こどもがつくるまち主催者サミット 講演資料』,1-4
- 2) ゲルト&マーギトグリューナイズル (2007) 「『ミュンヘンでの遊び』子どもと家族に優しい都市の理念」こどものまちサミット実行委員会・こどもがつくるまち研究会『こどもがつくるまち主催者サミット 講演資料』,30-31
- 3) Margit Maschek-Gruneisl (2007) 「Lecture for children-Children's University」こどものまちサミット実行委員会・こどもがつくるまち研究会『こどもがつくるまち主催者サミット 講演資料』,32-41
- 4) 田村光子 (2007) 「子どもと大人の相互作用による共助創造—「ミュンヘン市のこどもの施策に学ぶ補完性の原理—子どもがつくるまちサミットin佐倉」報告—, 公共研究第4巻第2号, 168-176
- 5) 田村光子、吉川亮 (2008) 「大学—地域連携による「子ども大学」の実践—「子ども大学in千葉大学」報告—, 公共研究第5巻第3号, 178-186
- 6) 浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美 編 (2008) 「子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために」(明石書店)
- 7) 広井良典 (2009) 「コミュニティを問いなおす」(ちくま書房)
- 8) 荻谷剛彦 (2006) 「教育と平等 —大衆教育社会はいかに生成したか」(中公新書)
- 9) ギル・ヴァレンティン著・久保健太訳 (2009) 「子どもの遊び・自立と公共空間—『安全・安心』のまちづくりを見直すイギリスからのレポート」(明石書店)
- 10) 田中優希 (2008) 「自由研究：民主主義について」(個人作文)